

レースっていいよね
第34回 「戦争と平和」の巻

映画『プライベート・ライアン』を観た。第2次大戦中の「ノルマンディ上陸作戦」から物語が始まる。

言うまでも無く私は戦争を知らない。いや、過去の戦争をはじめ、近年の湾岸戦争や数々の紛争は「メディアを通して」知ってはいるが、幸いにも直接体験することは無かった。だから、凄惨な戦場や目を背けたくなる現場の「真実」を知りはしない。

『プライベート・ライアン』はそのストーリーはともかく、展開される映像は当時の激戦の様を容易に想像させるほど「エグい」ものだった。この映像が果して真実に近いかどうかの判断は私には不可能だ。

しかし、映画を見終わった後に「戦争は如何なる理由であろうと悪である」との理由付けに達するには十分な内容ではある。

戦争映画といえば、最も心を動かした随一の作品がある。『シンドラーのリスト』だ。激しい戦闘シーンこそないが、精神的に直視するのが辛い場面が多く、平和な時代と国に生まれて、本当に良かった、と心から感じられた。

太古より人間は、それこそ数え切れない戦争を繰り返し現代に至っている。戦争により工業技術水準が発展し、また多くの犠牲の上に我々の文化が成立しているのは紛れもない事実だ。

願わくば、これからの未来に影を落とすような戦争が勃発しない事を祈るのみだがおそらく、それは甘い幻想でしかないだろう。日本では馴染が薄いだけで、現在でも紛争やクーデターは世界の何処かで勃発しているからだ。

それに、これだけ近代兵器が驚異的な性能の発達を遂げ、大量殺戮が遠隔操作で可能になった今、各国のモラル以外に戦争抑止を委ねられる手段はない。

これは勝手な理由なのだが、平和でなければ私も「レース」などという、社会的に何ら貢献しない(かもしれない)世界でメシを食って行けなくなる。それは非常に困る。

アメリカ滞在中、ニックと「出来れば戦争ではなく、平和的な解決方法を模索するべきだ」と話した。冗談で「テレビゲームとか？」と私が言うと、ニックは「親指相撲なんかはどうだ？」と言う。

かつては大戦で敵味方の関係であった私たちの間柄ではあるが、ジョークを交えつつ、こういう話が出るのはとりあえず、今この時間が互いにとって「平和で良かった」とつくづく実感するのである。

また、リンダは父親から土産物に貰ったという、箸のセットを見せてくれた。

それは日本人の目から見て、お世辞にも「良いモノ」ではなかった。いわゆる外人向けに販売されている色のハデなプラスチックの土産物だったからだ。しかし、プレゼントされた物を本当に大事にしている彼女の人柄を伺い知るには充分だ。

その箸には印刷で「宮島」と書かれていた。つまり、広島からの土産であるという事だ。アメリカ人にとって「Hiroshima」とはどのような意味を持つのか、一瞬私は考えた。もしかすると「勝利の象徴」という意識があるかもしれない。

私はリンダに「この宮島のある、広島を知っているか？」と聞いた。

彼女は当然のように原子爆弾による史実を知っていた。そして、その悲惨ささえも知っていた。正直、それを聞いて少しホッとした。

まだアメリカでは原爆は正しい選択だったと主張する人も大勢いる。しかし、その多くの人々が原爆による被害の実態を知りはしない。私は、兵器として原爆が駄目で銃は良いのかという極論にも答えは出せない。

無論、当時の日本が戦争によって犯した事実と比較できる物でもない。ただ、戦争そのものが悪である、としか言いようが無いのだ。

だから私は戦争とは無関係なリンダやニックにその責任を責めるつもりは毛頭無いし、むしろ彼らが日本という国について「理解しよう」としてくれることが嬉しかった。

外国、異文化、他人。

まずは歩み寄り、相互理解へ向けての人間関係を築くのが平和への一歩なのかもしれない。

